

滴の醬油も、暖味糲糊の中に葬ることが出来ない仕組になつて居る。

軍隊の糧食經理は先刻から述べた聯隊長などの外、どんな人々がどんな工合に監督するか、是れから監督のことを一言しよう。

大隊長は兵隊の食事に就て、餘程重大な責任がある。其故はだ。兵隊と兵食とは丁度ランプに於ける石油、蒸汽に於ける石炭といふやうな關係があるので、其善悪乃至多少は直ぐ兵隊の體力に影響する。體力に影響すれば随つて戦闘力に影響する。結局糧食と戦闘力とは離るべからざる關係があるのである。だから大隊長は、兵食上の大小種々のことに就て、指揮監督する権能を有つて居る、同時に重大な責任があるのである。そこで此先生よく炊事へやつて来て、或る時は炊事掛下士を、又或る時は糧秣委員を生捕つて、ウンと搾るのである。

今度は中隊長だ。中隊長は其中隊内に居る、兵隊といふ子供のお父さんであることは、説明するまでもない。ところで、親で居て子供に注意せぬものはない。中隊長の兵食に對する亦然りで、食物の品質、分量、調理法、嗜好と云つたやうな方面に手落があつたり、不適當な點があつたりすると、忽ち眼を皿大にして、掛の者の所へ怒鳴込んで來るのである。尙ほ又軍醫も衛生上の關係から、兵食に就て横鎗を入れる資格と責任とを有つて居るので、衛生上アであるの、こうであ

るのと理窟を列べ、絶へず小言をいふのが常である。

それなら此外にもう嘴を容れるものがないかと云ふに、どうして、先づ第一に師團の内に經理部長といふのがある。此の先生は前にも鳥渡云つたが、師團長と陸軍大臣と大藏大臣と會計検査院長との権能を打ち混せた様な、解り易く云へば八手の觀音様見たやうな権能を持つて居る。そうかと思へば半面では、軍隊の經理上慈父たり慈母たり、將た顧問役たる責任を有つて居るので、指導する時とか其指導通り旨くやつて居る時とかは、至極深切に扱つて呉れるが、云つた通りにせなかつたり、腹黒い遣方があつたりすると、一方の強い権能でもつて、大久保彦左衛門以上の権能を振り廻すのが常である。無論此先生には少からぬ部下がある。そこで先生自身又は配下の者共が、何日とはなしに、ノソリノソリ隊へやつて來る。而して賞めるかと思へば責め、敲くかと思へば撫でると云ふ遣方で、彼處にも此處にも手を入れるから、蒼蠅いと云つては悪いか知れないが、隊の方では經理部長のことを、彦左衛門と呼んで居るのに徴しても、其間の消息は大抵判断がつくであらう。

此經理部長なるものが若しも文官出身であるなら、假令少し位の行りうこないがあつても、何か旨く切り抜ける工夫もあるが、何しろ軍事百般の事に就て、海千山千………兎に角經理部長の

中には、現に陸軍大學を卒業して居るものもある程で、戦術や戦術に關係あることでも、兵器彈藥に關することでも、兵營生活の真相でも、何でもかでも軍隊の事は最大洩らさず、酸いも辛いも甘いも心得て居るから、何とも仕末に了へない。無論一厘一毛と雖ども、手品などの出来る隙を置く氣遣はない。ほんの一寸した整理洩とか違算とかがあつても、先生に見つかつたらもう最後で、只では濟まさぬ、直ぐ摘發して相當の手續に及ぶのである。

まだこの外に師團長の檢閲とか旅團長の巡視とかいふ時も、少からず經理委員や糧秣委員を苛めるのである。のみならず此外尙ほ中央部、即ち陸軍省の課員とか何とかいふ先生達も、時折やつて来て、色々手を出したり口を出したりして、隊長なり經理委員なり糧秣委員なりが、やつた仕事を拵くつて、裁判官のよくやる家宅搜索然たる、傍若無人の行動を敢てして行くのが例である。

昔は五十萬石も百萬石も、領して居た、殿様出の青年將校が、經理委員だの糧秣委員だのをやつて、其嚴重なのに肝を潰すのは決して無理からぬ事で、殿様出身でないものでも、大抵の人間は一月も是等の委員をやらうものなら、誰でも懲り／＼する程厳しいのである。丸で人を盜賊扱にして居る、こんな役目は眞平だとは、隊の經理事務に關はつて居る將校、殊に青年將校の口から洩れる怨言である。以て如何に其取締が嚴なるかを想像するがよい。

而かも今まで云つた所は、ほんの概略に過ぎない。どうだ此程になつて居ても尙ほ秘密の黒星が潜んで居たり化物が隠れて居たり、マツタ悪策を弄したり思ひも寄らぬ方面の費用の方へ廻したり、することが出来ると思ふのか。我輩は海軍以外の他の官公衙の行り方を、随分調査して見たが、陸軍ほど經理の糞嚴重な所はないやうである。

斯う云ふと君等は必ずや反問を起すであらう。軍隊であらうと艦隊であらうと、裁判所であらうと監獄署であらうと、國庫金を使ふ上の監督上に、甲乙緩嚴の差のある筈がない。然るに陸軍の方丈けが特別に其の監督が嚴重であるとするれば、見様に依つては、陸軍には横著者が多い、従つて最も監督を嚴重にするのだ。他の役所には正直者はかりだ、従つて餘り監督を嚴重にせんでも間違はない。反對に陸軍は監督が最も嚴重であるから間違はないが、外はさうでないからどんな糞當が陰で行はれて居るか知れない。と云ふ様に多種多様の疑問が起つて来る。等しく會計法なり會計規則なりに依つてされる仕事の上に、そんな違ひがあるものか。如何にも其疑問は起るかも知れない。だから順序に一言して置くが、陸海軍、と云つて海軍のことは能く事實を知らないが、軍艦などでは陸軍と相違なしのことである。さて陸軍では會計検査院の様な監督機關があつて、検査すると否とに拘らず、前に云つた様に最も嚴重に金銭や物品上のことを取締るのは、大いに理由の存すること

ある。外でもないが、會計上の事は兎角間違の起り易いものである。然るに一旦其間違が起ると、延て軍紀の上に非常に害を及ぼすのだ。ところが會計上のことは如何に軍隊でも、一々法律なり規則なりに従つて事をせねばならぬ。然るに軍隊は敵を殺すと云ふのが本来の任務である。従つて平時やつて居ることも凡て戦時が基礎となつて居るから、名は演習だ教練だと云つて居るが、行ること爲すこと戦争と違ひはないのだ。たゞ實弾がビュウ／＼飛んで来て、命中せまいまでのことである。さて然うあつて見ると、會計經理のことも重大なことではあるが、一方に於ける一分の誤差一秒の猶豫も許さぬ本来の任務の爲めに、十分心には掛けて居ても一々法律に照し規則に合せと云ふ工合に其方へ力を注ぎ兼ねる場合がないとも限らぬ。而かも今述べた通り國法は守らなくてはならぬ。詳しく云へば長くなるから止すが、斯の如く軍隊の會計經理は軍紀上と國法上との二方面から、特別に監督する必要があるもので、上に述べたやうに何處の役所にも例のない厳しい取締を實行して居る次第である。諸君考へて見給へ。特殊の任務を有するが故に、十分會計の方へ力を注ぎぬ場合があるかも知れぬ。然るに一朝會計上に間違が起ると、軍紀上に大害が生ずる。云つて見れば前にしかない目で、前の方は無論目は離せぬ、同時に後の方を見よとの無理な注文である。だが致方がない、出来ても出来ぬでも前後共に働かせなくてはならぬ。師團毎に經理部と云ふものゝ置か

れてあるのも、全く是等の理由があるからである。これで疑問が解けたであらう、否反問を起す必要がなくなつたであらう。

君等は秘密々と云つたが、會計經理の上に秘密などは少しもない。見たいとあるなら、計畫でも帳面でも炊事の實狀でも、進んで見せるのだ。議員でも記者でも誰でも、僕の云ふことが虚言だと思ふなら、どしどし隊へ行つて見るがよい。碁盤の目を見るよりも、よく分るやうになつて居る。

だが同じ經理の事でも軍備關係の様な、後ろに軍事の機密といふ奴が控へて居るものは、豫め其事由を公開する譯にはいかない。金となつて豫算面に現はれた時始めて、之は何々の結果に基く金であるとか何とか、相當の説明をするが、前以て見せたり、説明したりする譯には行かない。一體軍備といふ問題は、政治上に何等關係のない神聖な問題である。只豫算面に上つた時に、始めて政治臭を帯ぶることになるに過ぎない。勿論此場合とても、軍備が政治問題に化するのではなく、其結果である軍費が政治問題になるだけのことである。軍備は何處にあつても軍備で、語呂は似て居ても軍費とは、全く別物である。従つて豫算の上から、此上軍費を支出する餘力がないとか何とか、金の出途のないことを論ずるのは宜しいが、金の問題を離れて軍備が何うの斯うのと説くのは、お門違も甚しと云はねばならぬ。軍備の如何に參與するものは、軍人中でも元帥府とか軍事參議院と

かいふ
陛下

の最高軍事顧問府に身を置く、極く少数の人々に限るので、其他の者は、假し大中將の地位にあるものでも、一切與らないのである。従つて上級の要職にある者でも、當路者でない限り、軍備の内容に關し、嘴を容れる資格が毫もないのだ、況や其他の者をやである。此事を知らないで、國民の前に、何もかも公開せよなどと説くに至つては、平垣君の軍事的智識の、餘りに乏しいのに驚かざるを得ない。其れでは丸で軍事に對する當世流行の、彌次的議論と撰ぶ所なのである。本件に就てはまだ、説明したい點があるが、大體は了解したらうと思ふのと時間がないのと、此二つの爲めに之れで次へ移ることにする。

今度は委任經理積立金のことである。少し譯は違ふが、一小武士の妻に過ぎない山内一豊の細君でさへ、苦しい中にも萬一の場合を慮り、ついで鏡篋の中に藏めて居た金に、手を觸れなかつたではないか。治に居て亂を忘れずといふことは、昔の武士なり武家なりよりも、今日の軍隊の方が幾倍も幾層倍も肝要なのである。殊に今の軍隊では或る種類の戦用品を、毎年修理したり補足したりして行かねばならないのに、其金と云つては何處からも一厘も半銭も來ない。所謂委任經理の金の

内で旨く遺線して、其れ丈けのことを爲ねばならぬのである。

能く考へて見るがよい。委任經理は君等も述べた通り、國家から貰つた丈けの金で、是非とも何にもかも辨じて行かねばならぬ。不足が起つたからと云つて、一厘も呉れる所はない。然るに一日一名に付て、米四合二勺と麥一合八勺と、合せて六合の割合で、五日分なり十日分なり、即ち百石なり二百石なりを貰つて、隊の倉の中に積んで居る米や麥の現物とか、經濟上普通大買して置く、石炭とか醤油とか味噌とかいふ品物、又は平生苦心慘澹の結果揃へて積んで居る、高價な毛布とか絨服とか背囊とか靴とかいふやうなものが、一朝火事に遭つて焼けたら何うなると思ふか。軍隊丈けは天災地變なしといふものならよいが、さうはいかない。して見れば此場合に於て、幸に委任經理の積立金といふ奴があれば、其全部又は幾部は直ぐ復舊する事も出来るが、若し其金がないと全部新たに國庫から支出せねばならぬ。火事に遭つたら仕様がな、食はずに居れ、著すに居れといふ譯にはゆくまい。差し當り著る物と食ふ物丈けは致し方ないが、戦は鳥渡なさ相だから、外の物は是れから復た緩るゝ溜めて、元通り拵へて行くさと、暢氣を云つて居れるか何うか恐らくそんな誤安神をして居る譯にゆくまい。各隊が委任經理で以て苦心に苦心を重ね、積立金を拵へて持つて居るのは、此理由があるからだ。

それから米の相場を高く見積つて豫算に計上し、澤山な金を取り込み、其差金を誤魔化して、不正な方面に廻す云々と玉波君が云つたが、謬見も此處に至れば寧ろ滑稽である。米も委任經理に相違ないが、それは現物で貰ふのだ。尤も餅食つたり蕎麥食つたりするから、皆まで米では貰はぬ即ち一日一名に付て、麥米合せて六合やると定まつて居るが、其定量丈け米や麥を食はないで他の物を食へば、定量から缺けて居る部分に就ては、其れに相當する代價を金で呉れることになつて居る。假へば日に米四合二勺と麥一合八勺とを食ふべきところへ、お祭か何かの爲めに、麥の代りに、小豆一合八勺を混ぜた小豆飯を食つたとすれば、麥を渡さぬ代りに之れに相當する代金を、當月師團に於て競争入札で、何千石も買入れた相場を以て、金で呉れるのである。供し結局は、一名一日米四合二勺と麥一合八勺の割合で、現物を貰ふのと少しも變りはない。従つて米價が一石二十圓も二十五圓もする時でも、一石八圓か九圓しかせぬ時でも、又麥の相場も、非常に高い時でも安い時でも委任經理の上では同じである。只米や麥ばかり高く、小豆とか蕎麥とか餅とかが安い場合に限りに、徳すると云ふに過ぎない。其代り時としては、米や麥が安くて反つて小豆とか蕎麥とかが、高いこともあるので、損することもないではない。だが一般に米や麥の高い時は他の物も高いから、米や麥の相場の高下は、隊の經濟に關係なしと云つて差支ない。此様な譯であるから、濃く云ふまでも

ない話ではあるが、米や麥は値段即ち金で決算をせないで、現物即ち量で精算するのである。然るに豫算の編成は米や麥では出来ない、何づれあつても金で見積を立てねばならぬ。此時始めて米や麥の相場を、種々な方面から觀察し推定して定めるのだ。ところが其相場を豫算する場合に目先が頗る高い、例へば其年の一月の米相場は一石十圓であつたが、後は毎月上りで、九月頃は十五圓にもなつて居る、のみならず日本内地も不作だ、海外の米産地も不作だと云つたやうな時は、既往の平均價格が十一、二圓位であつても、一石十六圓にも十七圓にも、見積らねばならぬことがある。

一體一家の豫算でも一國の豫算でも、未來のことを豫定するものであるから、寸分事實と違はぬといふ譯にはゆかないが、最も事實に近い結果を見るものでなくてはならぬ。殊に兵隊の食ふ米の相場の豫定の如きは、最も事實に近からんことを要するのである。と云ふのは、此米代などは、豫算の上でも補充科目と云つて、豫め豫算で定めて置いた相場よりも、高價でなければ買へないやうになると、豫算の上に設けてある豫備費即ち豫備金から、足りる丈け補充することになつて居る。だから、目先の高いのに頓着なしに、米の相場を安く見積つて、豫算の上に計算して置くと、時に依つては豫備金の底を拂つても足りないやうな事が出来、國家の財政上にとんだ齟齬が起るのであ

る。借てさうなつては、お隣の或る國の、お先眞暗な豫算の様なものになつて、折角の豫算が空算か無算か分らないものになるのだ。又幸ひに豫定したよりも安く米が買へれば、豫算に餘りが出来て、翌年度の歳入となるのである。餘つたからと云つて、一厘一毛チヨロカス譯ではない。今度は委任經理の利害である。ところで之れを述べる前に一言すべきことがある。外でもないが委任經理のざつとした沿革其物と、之れを設置するに至つた根本的理由と此二つである。我陸軍の委任經理は明治八年に初聲をあげたもので、それが同二十一年に少し其範圍が擴張せられ、同じく二十三年に始めて法律で明確に定められ、後幾度かちよいと改正され以て今日に至つたのである。それなら何う云ふ理由で斯う云ふ制度を定められたものであるか、極く簡単に摘んで云へば、國家と軍隊との何方から見ても、經濟と便利、此容易に落合つて呉れない二つの得があつたからに相違あるまいと推察する。

沿革と設置された根本的理由の解釋とは此位にして止めて、現在此制度に對する僕の觀察はどうかと云ふに、別段手前味噌を賣る譯ではないが、百利あつて一害なき最良制度であると斷言することゝを憚らぬ。なせなれば、チャなかつた今から僕の云ふ所を聞き給へ、成る程と會得が出来るに相違ない。

軍隊で使ふ紙とか筆とか鉛筆とか、炭とか石炭とか箒とか、雑巾とか机とか腰掛とか、又食物とか著物とか石鹼とかの類が、若しも委任經理でなくて即ち隊の請負的でなくて、入用丈け渡すと云ふ世間普通の遣り方であつたらどうであらう、恐らく今の二倍の金をかけても到底足りる氣遣はあるまい。あの血氣盛な兵隊が、何千人と圍つて居るのだ。地方の人達は中へ入つてよく見るがよい。其食ひ方の烈しいこと、其動作の手荒いこと、實に呆れかへる程である。逆も國家經濟呼はり位ぢや、中々取締れるものでない。然るに只今の制度であると、上は隊長から下は兵卒に至るまで、委任經理即ち其隊自身の經濟といふことが終始頭にある。そこで著る物でも食ふ物でも使ふ物でも、我慢もし大切にもすることになるのだ、之れが人情の然らしむる所である。

委任經理と云ふ制度は、自然各隊の間に競争が起る仕組になつて居る。何しろ何の隊も貰ふ金の高に變りはない、勝負は爲方の上手下手、少し高尚に云へば優劣は遣方の巧拙に依つて岐れる、之れが抑委任經理なるものゝ上に競争の起る原因となるのである。由來軍隊は、何かと云へば一命賭けて勝負を争ふものだ。従つて爲方一つで右とも左とも上とも下ともなる、委任經理を茫然見通す筈がない。丈夫な物を著て丈夫な物を使つて而して體力の強くなる物をうんと食べて、其上尙ほ練々たる餘裕を作らうといふ、猛烈な競争が各隊の間に起るのは、決して不思議はない當然である。

凡そ物事は、競争に依つて進歩するものである。軍隊經理が逐年著しく進歩して行くのは、此競争に基く點が頗る多い。だから單に軍隊經理の向上進歩といふ方面のみから見ても、委任經理は非常な利益のあるものである。尙ほ軍隊の食物の如きは、前に挙げた様な利益が假しないにしても、委任經理でなくてはならぬ理由がある。外でもないが、普通の時は粗食粗菜でもよろしい、だが、いざ名譽射撃だ、強行軍だ、長途騎乗だ、猛烈な野外演習だと云つたやうな場合は、時に體力の續く丈の、滋養分を取らせなくてはならぬことがある。同時に乾麵麩に梅干位を與へて、ウンと困苦を嘗めさせねばならぬ、必要のあることもある。此外演習經過の如何及演習地の狀況などに依つては、止むなく食はず飲まずに、活動を繼續せねばならぬことも往々ある。之れが委任經理である。と長短善悪旨く補ひも附くから、無理なと思ふことも、實施することが出来るけれども、委任經理でない、後で補ひの方法がない。然うなると、ツイ部下が可愛くなつて来て、決行しようと思ふことも、自然鈍り勝になるのは、矢張人情の免れない所である。

物價就中生魚のやうなもの、相場に絶へず高低のあるのは猶ほ、寒暖計に昇降あるが如く、猫の眼に變化あるが如く、海水に動搖あるが如しである。だから若しも軍隊の賄料の如きものが委任經理でなかつたならば、日毎此物價の影響を受けるので、給養官の全部が僕程の利手ばかりであつても、

到底何んとも始末が著かないに相違ない。然るに委任經理即ち請負的になつて居るお蔭で、今日は食ひ込んでも明日取り返し、今週はマイナスになつても來週で補ひがつき、上半季で損をしても下半季の得で填め、今年中は缺損續きで居ても來年に於て挽回すると云ふ風に、旨く調和がとれてゆくののである。此一事を見ても隊のやうな所では、是非委任經理でなければならぬことが分るのであらう。

疊の上に絹布を纏ふて居て、軍隊の事が解るものでない。二君は其道を経て居ながら、よくもそんな愚論が吐けたことだ。之れで大體の答辯を了つた考だ、何うだグウの音も出ないであらう。玉波君の例を挙げた新聞記事のことは、以上で明かであらう、確報であるか、虚報であるか、最早説明の要はあるまいと思ふから、之れで切り上げにする。

平垣、玉波

自己の存在危しとでも見たか、大いに懸河の辯を弄したネ。實は吾人とても大體は知つて居たが、君を挑發して、陸軍經理の計畫より實施に至る経路を述べさせ、少し不足して居る、經理上の智識を補はんとの策略で、鳥渡猛烈に、心にもない矢を向けたのである。大山鳴動して鼠一疋といふことがあるが、此議論は鼠どころか蠅一つも出なかつた。だがお蔭で、大いに經理上の智識を増した。

さて明晩は何かな。

二四、赤裸々にしたる將校の價値

破天荒の奇抜な問題を案出した。サア議論開始だ相手になれと、やり出したのが玉波中尉である。

玉波

裁判官上りは辯護士として、外交官上りは正金銀行や三井物産等、海外に得意先を有つて居るところの番頭として、海軍將校上りは船頭として、其他各種の官吏技術官上りも皆相應に潰が利く。中には半價位に下落するものもないではないが、中にはまた、お鍋どんが退職して立派なお神さんとなり酌婦が廢業して女將となり、ありし昔に變る豪氣な勢力を示す様に、在職時代よりも潰となつて、反つて相場を上げるのも少くない。然るに我々仲間の潰と來たら、飲み残しのビールか羅詰の殻と同様に、相場のせぬこと夥しい。元は無試験檢定で中等教員の體操免狀を呉れたが、今では藝妓の手踊のやうなものである普通體操と、兵式體操とを併せて一つの免狀としたが爲めに、其手踊然たる方の試験を受けて合格せないと、體操の免狀さへロハではよこさぬ。それであるから我々が下ろし其儘でなれるのは、中等學校の助教論心得と云つたやうな、單に兵式體操丈けを受持つに過ぎ

ない、月給の最高額十五圓位のところとは情ない。而も此體操の方面に融通の利くのは我步兵科と、前制度時代に歩兵科から出た輜重兵と經理部のもの位なところで、他兵科の者は此方面の需用すらもない。だから一たび僕等が陸軍外へ出ると、琵琶歌の「城山」ではないが、昨日迄は陸軍將校と仰がれて、部下の尊敬世の覺え、比ひなかりし英雄も、今日はあへなく腰辨の………では眞にやりきれないではないか。斯ういふと君等は、主計は實業家として軍醫は醫者として、立派に世に立つことが出来るやうに考へるであらう。ところが帝國大學の商科や醫科を卒業して行先がなくて困つて居る、所謂高等遊民先生達が其邊にウヨ／＼して居て、なんならお錢は後廻しそれもいやなら米代丈けでもと云つたやうな、破天荒の提供で得意の奪ひ合をやつて居る世の中に、頭の高い氣の太い、其辯技能はから駄目な、君達を背負ひ込むやうな物好き者は、今の世界に斷じて一人もないことは、我輩堅く保證する。尤も保險會社の下等勸誘員や、市役所の衛生巡視位には雇手もあるであらう。だが何れにせよ我々が今軍服を脱ぎ社會に乗出して、身を粉に働いて漸く得ることの出来る一ヶ月の収入は、樂觀的に見積れば十五圓、悲觀的に見積れば十圓が關の山である。榮枯盛衰は人世の常とは云ひながら、快馬長劍の威風堂々たる將校も、投資にして見れば潰して見れば、直打のないこと如件である。なんと心細いではないか。………

二四 赤裸々にしたる將校の價値

廣山

玉波君の説には大反對だ、潰の相場が安くても低くても情けないことも心細いこともない。潰が利かねば利かぬ程、却て我々の直打があるのだ。考へても見るがよい、どんな品物たるに論なく、價格の低いもの程潰しが利くものだ。云ひ換へて見ればやくざ物程普通の相場と、潰の値段と懸隔がないものである。書物でも五十銭か三十銭の品だと、買手もあるから相應の金になるが、百圓二百圓とする洋書などになると、大抵の奴では書名すらも分らぬから、いざ投賣となれば、原價の五分分か千分の一にも足らぬ、反古として拂ふより外はない。著物でも木綿物だと餘程著破つてから賣つても、二分の一や三分の一は、取れるが絹物だと右から左へ賣つても木綿ものゝやうな譯には行かぬ、帽子でもたかだか一圓か、一圓五十銭位の中折か鳥打などなら、大した損をせぬでも捌けるが、二十圓三十圓とするバナマやシルクハットになると、非常な損をせぬと手離せぬ。人間も其れと同じで、安月給取か下等労働者であると、時と所により相場に多少の高低はあるにせよ、左程相違のあるものでない。教育家でも小學教師位なら、書記事務員其外の方へ廻はしても、本職と伯仲の間で捌口はいくらもあるが、大學教授などになると、とてもそんな旨い調子にや行かない。警察でも巡查であると、本職の儘も潰も殆ど價格に甲乙はない、ともすれば潰の方が反つて高價に賣

平垣

れる場合が随分ある。然るに一寸のことで、警部は最早うは行かない。婦人でも然うである。仲居か酌婦なら、丸でも潰しても天下到る所殆んど同値だが、半玉だの藝妓だのとなると、殆んど潰が利かないではないか。玉波君は裁判官や外交官は大に潰しが利くやうに云つたが、裁判官や外交官にも種々あるから、どの邊をいふたのか分らぬが、裁判所書記とか外務書記生とか通譯生とかいふ、下の方なら随分潰しも利くけれども、上級の判檢事や外交官になると、矢張り僕等と同じで中々買手はない。して見ると、潰しの利かないのが有り難いところだ。棄賣にしても容易に買手のないところが最も味のあるところである。我輩が潰が利かぬからと悲觀するの要はない、潰の價格が安いからと弱音を洩すにや及ばない、反つて慶すべしである祝すべしであるとなすのは此處である。殊に我々將校は服役僅かに十一年にして現役を去つても、莫大な恩給金が下がるのだ。十一年と云へば長いやうであるが、戦争に出たり滿洲其他海外の守備にいつたりすると、一年が三年になつたり二年になつたりするから、オヤと思つて居る間に恩給の權利が生ずる。此恩給金さへあれば假しまる遊びで居ても、立派に中流以上の生活をして行くことが出来る。無論子女の教育も思ふやうに施すことが出来るのだ。何を苦んで、安月給取などに身を墜さんやである。

二人の議論は根柢が成立して居ない。そんな議論に口を出すのは實に詰らぬが、順番が来て見れば黙つても居られない。殊に此場に及んでなんとかするのは、廣山君の漢語の口調でいふと「勇なきに似たり」と云つたやうなことになるから、一言以て二人の蒙を啓いてやることにしよう。

我輩が此議題は成立して居ないとするのは、無論理由のあることだ。一體將校は終身官である。一定の年齢に達するまで、他意なく軍務を奉すべきものである。雨が降らうと、風が吹かうと、其位置に狂ひが生ずるやうなことはない。そんなじよそこらにござる今日あつて明日どうか分らぬやうな、官公吏達と譯が異ふ。薄氷のやうな危険いところを棲家としてお出なさる、お役人達とは全く趣が違ふのだ。働ける間、動ける間、國家の爲めに盡せばそれでよいので、潰しとなつたり拂下となつたりして、生き恥を晒すやうなことは萬ない筈である。下等動物の中には或る任務を果せば其儘往生を遂げるのが随分あるが、此意味に於て我々は丁度此下等動物と同じである。即ち武人としての天職を全ふしたら、それが最後である。それから上に尙ほ直踏みだの瀬踏だのと、財産家の倒れた時の家具や道具のやうな取扱を受くべきものでない。

斯ういふと或人は云ふかも知れぬ、武人としての生命はなくなつても、人間としての生命はまだある。命がまだある以上は、人間としての重量を天秤にかけて見たからとて彼是はない。此天秤で見

る重目が、即ち赤裸々の相場である。殊に軍人は外の官吏とこと異り、在郷者となつても戦務に堪へる間は、幾度も幾度も出て、君國の爲めに盡すべきものである。だから現役を退いたらもう其れ切だ、何處に居ても何うして居てもよいといふ譯にはゆかぬ。どんな非常時に遭遇しても、ちやんと父母妻子其他後顧の憂のない丈けのことは、して置かなくてはならぬ。そこで其憂のないやうにして置くには、退職後と雖も生命のあらん限り、社會に出て奮闘すべきである。即ち昔日のサーペルなり劍なりを、筆なり算盤なり又鋤鉞なりに換へて、國の爲め將た家の爲め活動せねばならぬ。此活動する時の價值が、とりもなほさず赤裸々の價值である。其相場を豫め研究して後日の参考としたからとて、別段差支はあるまいと。なる程、職を退いても人間としての生命は、まだあるのが最大多数である。従つて國家にことあれば、何日でも飛び出して粉骨碎身盡すべきは當然である。だから其時期の來るまで、昔日の武器を今日の筆算盤鋤鉞に換へ、懸命に働いて論者の注文の如く企圖すべきは、否期すべきは勿論である。何にも恩給にひばり附いて居て、徒食の毒蟲となるといふのではない、どこまでも働かなくてはならぬ。併し働くのに二様ある。他人の手先となつて働くのと、獨立獨歩で働くのとがそれである。君等二人の説くところは、他人に依つて衣食しよう、人手にあやかつて財を求めようとする、所謂依他主義といふ極く意苦地のない方と、徒食して國家の

寄生蟲とならうとの二つである。従て月給十圓の價値しかないとか、十五圓位は取れるだらうとか、只居ればよい何を苦しんで安月給取などに身を落さんや、などいふことが口に出るのである。人手に縫り附て自己の運命を開拓しようとするのは、智力體力共に許さぬ婦人のことだ。堂々たる五尺の男兒が、左様な考を持つてどうする。軍人の業務は特別で、上下間には服従、左右には協同、全體には一致之れがなくてはならぬが。普通の社會に出で働く場合に服従などはいらない、どこまでも獨立獨歩でなくてはならぬ。服従といふことが根本となつて居る軍人の業務でさへも、或る程度までは獨斷專行、即ち獨立獨歩を許して居るではないか。一から十まで、他人を當にして事をしようとするのは、大なる心得違ひである。

依頼心これ程男子に毒なものはない、自分の運命は自分で開拓すべきである。殊に軍旗の下で修業を積んだ軍人は、何も他人に縫つて事をせぬでも、現役時代に鍛へた強壯體を資本として、立派にやつてゆける農業といふ、武人上りに最も適する業務がある。日本にはもう此耕耘地を開拓する餘地がないといふ勿れ、北海道樺太朝鮮是等の土地には未開の地が頗る多い。堅實な志操と健全な體軀を有する軍人上りに、是非此方へ來て貰ひたいと、是等の土地が双手で招て居るではないか。若し是等の土地は普通の過剩民の領分だ、我々軍人上りの入り込んで邪魔する場所でないといふなら、

南洋可なり南米可なり北米可なり、いくらも行先があるのである。何を苦んで昨日まで一喝の下に、扱つて居た下らぬ奴等の前に出て、したくもないお辭儀をして、僅かのお心附を頂戴する幫間然たる業務に就かんやだ。

日本人は、一致團結の精神が歴史的に、發達して居る代りに、獨立獨歩の精神が缺けて居るやうに思はれる。獨立獨歩の發達した一致團結でないと、何事をしても完全な成果は得て望むべからずだ。國民の師表とならねばならぬ君等にして、そんな憐むべき婦女子的考を有つて居て何うする。まだ吐きたいが時間がないかな。

廣山

時間はない。従つて君の議論に對し銃先を向けたい點がないでもないが、長くなるから後日に譲り、本論は之れで終結にする。

玉波

賛成々々。

二五、文明開化と戰鬪力との關係を論ず

二五 文明開と戰鬪力との關係を論ず

戦術も文明的でなくてはならぬ。戦術も現代式でなくてはならぬ。孔明や幸村の用いた戦術は、講談師の材料となる位で、今日では参考ともならない。武器彈藥裝具皆然らざるはなしてある。昔の弓矢とか鎗とか乃至鎧兜とかは、大正の新時代では、子供の玩具としても少々不足である。昔は戦争と云へば、人間と人間との喧嘩であつたが、只今では金と金との角力に非ざれば、則ち智識と智識との争である。だから現時の戦争は、文明と文明との力較である。従つて文明程度の高い國は戦へば必ず勝ち、其低い國は戦へば必ず負けると思へば間違はないのである。とは世界各國に非常な賛成者のある説である。此説に従ふと、文明開化と戦闘力とは常に比例するもの、即ち世が文明に進み開化に赴くに從ひ、戦闘力も強大になるもの、やうである。果して然るか否か、彼等三人士官が今から始める論戦を俟まつて後知るべしである。

如何に勇敢な軍隊があつても、精銳な艦隊があつても、金がなくては到底今日の戦争には勝てぬ。金がなくては雷に戦争になつて勝てぬばかりでなく、第一平生に於て、勇敢な軍隊や精銳な艦隊を備へて居る譯にゆかないから、平戦を問はず、貧乏國は敗者の位置に立つことを免れない。現に貧乏國で、立派な軍隊や強大な艦隊を、有つて居るのは一國もないではないか。無論其筈である、又

然うなくてはならぬ筈である。實に金なる哉金なる哉である。金ほど貴い有り難いものは、何と云つても世の中にあるまい。

一體人間が懸命に働く働かぬ、誠實に勤める勤めぬといふことは、報酬の多寡にあるのだ。會社銀行商店の中を鳥渡覗いても、其然る所以が歴然と見えるのである。月給が高い賞與が多いといふ所には、勤勉家もあれば利手も居る。否殆んど然ういふ人のみが集つて居る。然るに財政が不如意である、前途發展の望もないといふ所には、屑の屑たる先生達ばかり、集つて居るのが常である。さてさうなると、愈々以て金である。名譽だの光榮だのと云つて居る時代でない、一厘でも金の餘計に取れる仕事が一番である。

見給へ、金には比較的不足もあるまいと思はれる、堂々たる華族の子弟達でさへも、軍人は名譽は名譽だが第一命が危険だ、其上金も濡手で粟といふ譯にはゆかぬ。否其地位を保つて行ける丈けしか取れない。只其収入が確實なものと、恩給に速く有附く位のことである。こんな所よりも樂して金になる實業界がよいとあつて、算盤勘定から割出して、素町人の手代たらんことを希望する者が、どん／＼出るではないか。尤も官尊民卑の甚しかった昔ですらも、「地獄の沙汰も金次第」といふやうな諺もあり、又「惚れ薬に何が良からうと蠅蠅に問へば、佐渡の土より外にない」と云つたやう

な、俗語もあつた程である。況して大正の今日である、金さへあれば眼に一丁字がなくても、國會議員にもなれる。會社銀行の長であるとか頭取で御座るとかと、威張ることも出来る世の中である。従つて只今では、國家の干城から成立つて居る軍隊も、見様によつては、金持が自衛上番人として備へて居る、一個の機關であると解釋すれば、出来ないこともないのである。

斯ういふ要領で論じて見ると、勇敢な軍隊や精銳な艦隊は別として、先づ立派に見える軍隊とか堂々たる艦隊とかは、金があれば幾らも譯なく備へられる話である。されば實質を問はない限り、金さへあれば幾らも大きな國防機關を持つことが、出来るのだから、大軍備を望むならば、大金を儲けることを考へなければならぬ。要するに軍備は富の反影であつて、富を離れて獨り軍備が生存し得るものでない。

最近或る學者が、新聞紙上に發表して居た説も僕と同意見で、軍備にはかり金を掛けて、國が枯れてしまつたらどうする。國が枯れたら軍備は不用だ、乞食の住家に門戸が要らないと同じである、と云ふのであつた。なる程それに相違ない。家の中に金があつたり寶があたりしてこそ、垣とか門とか戸とかも必要であるが、何もなかつたら、開け放して置ても盗人の入る氣遣はない。僕は其比喩の至妙なのに、心から敬服して居る一人である。斯ういふ次第であるから、富あつて始めて軍備

を設けることが出来るのである。金がなければ軍備の必要もないし、假し必要があつても設けることが出来ないのだ。

斯ういふと、金がなければ軍隊も艦隊も、置く譯にはゆかぬことは分つて居る。併し幾ら金があつて、幾ら澤山な軍隊や艦隊を拵へたところで、實質が不良で所謂獨活の大木では、何の役にも立たぬといふ人が、あるかも知れないが、それは其一を知つて其二を知らぬからのことである。といふのは、元來軍備といふものは、必ずしも戰爭の用に供するばかりのものでない。過半以上は平和を保つためのものである。既に軍備設置の目的の半分以上が、平和を保つにあるとすれば、其實質を深く詮議するには及ばない。平和といふことが保てる程度であれば、其れで結構至極である。山案子は烏や雀と組打する爲めのものでない、目的は極く單純で、彼等を嚇して近附けぬにあるのだ、蒔いた種を掘じくられなければそれで結構だ。芽の出かけたところを、食はれぬければ申分なした、軍備の目的も山案子と同じで、どこまでも愚嚇が利きさへすればそれでよろしい。ところが愚嚇を利かしよとするには、嵩の小さいものではないけない、是非嵩の大きいものたることを要する。嵩と云つては少々語弊があるかも知れないが、結局數が澤山あればよいのだ。假令少し位やくざでも、數さへ澤山あれば數でこなせるのである。諺にも、衆寡敵せずといふではないか。して見れば獨活

の太木でも宜ろしい、深く憂ふるに足らずと信ずる。然るに其愚嚇の利く程の軍備を設けて置くには、大變な金が要る。大變な金が要るから、其金を拵へる方法を考へねばならぬ。其方法を考へるには、人に優れた智識がなければならぬ。其智識を得るには學問といふ奴に依らねばならぬ。ところが野蠻に蒙昧が附物である如く、文明に學問は附いて離れないものである。そこで金を儲けるには文明でなければ駄目だ、野蠻では有る金も、失くなつて了ふといふ結論になるのである。

諸君は或は思ふであらう、金を儲けるには、文明でなければならぬといふのは間違つて居る。其證據には、野蠻の昔は生活が極く樂であつたが、世の中が文明になるに従つて物價が高くなり、生活が日に困難となつて來る事實がある。維新前に生活難などいふ聲が何處にあつたかと。併しそれは皮相の觀察で、取るに足らない。なる程生活難の聲は、文明の世の中に多い。多いには相違ないが、之れは上下一般のことではなくして、或る一部分の者だけが、生活困難に陥るのである。即ち文明の進歩と共に、貧富の懸隔が甚だしくなつた爲めである。別段有つた物が減つたのではない、たゞ一方に偏つた丈けのことである。然らば其偏つた原因は何かと云へば、いふまでもなく競争の結果、智識のあるものが智識のないものに打勝つたからである。結局文明が野蠻を撃退したのである。アイヌが漸次北へ退き、内地人が其後を追ふて行くのと同じである。だから生活難の聲の起るのは、

取りも直さず、文明が野蠻の金を吸収する立派な證據である。野蠻人が粒々辛苦の果に拵へた金を、文明といふ優勝者が、一蹴めにするのは争はれぬ事實である。我國なども、文明だ開化だと自惚て居るが、生蕃などよりは文明でもあらう、又開化でもあらう、だが歐米列強國とは、比べものにはならない。従つて貿易でも、輸入超過といふことが免れない。其免れないのは、彼等文明の優勝者に舐められて居るのである。彼の僅かな所謂舶來品を持ち込んで、血の氣のなくなる程金を搾つて行くのが、其生々として居る證明である。

話題が脱線又脱線して、機關車が沼田の中へ入り込んだやうな事になつたが、括つていふて見ると、今日の戦争は、文明の利器に依らんことには、到底勝利は得られない。虎でも獅子でも、小さい人間にしてやられるのを見て、其邊の消息がよく分るのである。従つて文明開化は戦闘力を強大にし、旺盛にするばかりである。實に貴重無比のものは文明殿である。尊嚴無比のものは開化様である。

玉波

平垣君は恐るへき文明崇拜者である。其云ふところ其吐くところ、一として文明に謳歌せざるはなしである。富の高低も智識の深淺も兵力の強弱も皆悉く文明の程度に正比し、開化の如何に伴

ふと云つたやうに聞えたが、君の様な人間が日本に居るから、甘くもなければ辛くもない、變手古な味のシヤムも賣れ、一日として續けられない、不味い麵麩も捌けるのである。斯る人達が日に殖ゑて来るから、掛りもせない鼻眼鏡をも無理にかけて、御勞苦にも始終手を當てる程、其落ちないかを氣に懸けて居る先生も出来、立派な顔を持ちながら、鼻缺か何かのやうに、覆面を用ゐるやうな不心得な婦人も出来てくるのである。文明と云ひ開化と云ふ、名丈け聞けば誠に立派であるが、阿諛とか薄情とか輕薄とか、マツタリ虚榮とか柔弱とか拜金とかが、文明の副産であることを知ると、文明の文の字を聞くのも厭でならない。

さて今より本題に移るが、平垣君の論に對して我輩は、絶體に反對せざるを得ない。僕は文明開化といふものは非常に戰鬥力を弱くすると考へる。一體戰爭といふものは極く野蠻的のもので文明的のものでない。ところが文明と野蠻とは、並進せないこと、恰も兩釣瓶のやうなものである。一方が上れば一方が下るので、二つ共上るとか二つ共下るとかいふことはない。従つて文明力が、強くなると、野蠻的の戰鬥力が反對に弱くなるのだ。なる程文明が進歩すれば。知識従つて向上し技術従つて發達する。併し智識と技術丈けでは戰爭は出来ぬ、絶對に出来ない。といふのは、戰爭は机の上で出来るものでもなければ、工場内で出来るものでもないからである。だから、平垣君の

述べた一語一句毎に、順序に二の句の續かぬ程攻撃して見たいが、他説を攻撃するばかりが能でないから、人の意見に關係なく僕の所見を述べることにする。

世が文明になると、口の人々が殖えて手の人が減る事實がある。即ち理屈家が澤山になつて、實行家が減少する事實がある。現代の有様を見給へ、それに相違あるまい。然るに戰爭は口では出来ない無論理屈を並べて見ても、何等効能はない。唯、手あるのみである、實行あるばかりである。之れが文明なるもの、戰鬥力を減ずる原因の一つである。

世が文明になるに従つて、衛生思想が發達する。衛生思想の發達といふことは、結構なことではあるが、餘り發達し過ぎると、害があるのである。我輩曾て、或る衛生家と議論したことがある。外でもないが、其人が僕に向つて、「人糞馬糞、其他どんな所へでも、直接に下す鐵砲の尻を、鳥渡布片で拭ふた位で、居室へ持込むなどは衛生上危険ですな」と、又曰く除隊になつた兵隊さんのいふのを聞くと陸軍では、布片か何かで、くるんではあるさうですが、不潔な靴刷毛を、服とか帽子とかを拂ふ絨刷毛と一所に、麻袋とかいふ袋の中へ容れることになつて居るとか、靴刷毛などには、どんな微菌が附いて居るか知れたものでないから、之れも危険至極な話ですな云々」とのことであつた。そこで僕は、仰の通り危険でもあり不潔でもありません。だから銃の尻位は、消毒でもすれば

よいかも知れませんが、何しろ一日か半日の間にも、幾十遍と擔銃をしたり、立銃をしたりせねばなりませぬので、室内へ持込む時だけ、叮嚀にやつて見たところで、其前に、手なり彈藥盒なり、又服なり帽子なりに、ちやんと附著く丈けのものが、附著いて居ります。ですから、毎日服とか装具とかを、全部消毒でもしますれば格別、銃丈け特別扱にして見たところで、矢張り五十歩百歩でせう。又一度演習を始めまして、折敷なり伏せなりの、號令がありますれば、野でも山でも畑でも田でも、勿論其處に糞があらうと何があらうと、座るなり倒れるなりせねばなりません。無論何か附著いても、拭くの拂ふのといふ譯には参りません。此事が分りますれば、刷毛一件も容易に解決が、著くだらうと信じます。と答へた。すると衛生家先生は、さう聽いて見ると、致方がありませんなど、會得が出来た模様であつた。塵埃が立つから微菌の襲來だ、少々惡寒の氣味がするから醫者だ、少し頭痛がするから藥だといふやうになつては、行軍も演習も出来るものでない。尤も平時は、そんなことを云つて居ても、通れるかも知れないが、戦時となれば、馬の足跡に溜つて居る水で、露命を繋げねばならぬことすらある。雨の下雪の上と數へるまでもなく、有ると有らゆる不衛生な動作をせねばならぬのだ。然るに戦時に於て、そんな困難に打ち勝つには、平生から其練習を積み、其習慣を養つて置かなくてはならない。あれも衛生上危険だ、之れも衛生上不利だと云つ

て居た日にや、兵隊の仕事は何一つ出来ないことになる。今云つた點なども、文明なるものが、戰鬥力を弱くする原因の一つであらう。

文明と贅澤とは、丁度腐水と子子との關係のやうなもので、全く附いて離れないものである。ところが、贅澤と云ふ奴ほど軍隊に取つて、厄介物はないので、其害毒を及ぼすことは、實に結核菌以上である。善い物が著たい、旨い物が食ひたいとなつては、前回は述べた如く、軍人の任務は逆も果せるものでない。近頃の兵隊は、餘程奢つて來たやうである。善い物を食はせても不味いと云ひ、澤山著せても寒いといふ聲を聞くのが其れである。日清戦争前の兵隊の給養は、今日から見れば頗るお粗末なものであつた。それでも當時の兵隊は喜んで著、喜んで食て居たものである。そこで彼此對照して研究すると、文明が人を贅澤にするといふことが、直ぐ了解出来るのである。いふまでもなく贅澤な人間に、懦弱でないものはない。然るに懦弱であつては、苦勞した後で、命を捨てねばならぬ戦争が出来る筈がない。よし又出來ても、結果が餘りかんばしくないに相違あるまい。して見ると、此邊から見ても文明なるものは、戰鬥力を不活潑にするものと云はねばならぬ。世が文明となり開化となるに従つて、法律思想が發達する。論ずるまでもなく、法治國に生存して居る以上、起るにも寝るにも、法律の支配を受けないものはない。だから法律思想の發達といふこ

とは、嘉すべきことではあるが、非人乞食が物を貰ふ上にまで、權利呼りをするやうになつたり、親子夫婦の間にまで、權利だの義務だといふやうになつたりしては、其害毒も亦夥しと云はねばならぬ。殊に軍隊内の一舉一動のことに、權利が飛び出したり、義務が這ひ出したりして呉れては、困ると云はんよりは、寧ろ悲しむべき原因となるのである。

游泳演習を行つて溺れた者が出来た、ソレ人權問題。夏の長途行軍に日射病患者が生じた、ソレ人權問題。冬の雪中行軍に凍傷者があつた、ソレ人權問題。と騒ぐやうになつては、烈しい演習も強行軍も出来たものでない。近時世論が蒼蠅いので、猛烈な演習や行軍を避けるやうな氣味がありやすまいか。若しも然る氣味が針の先ほどでもあつたら、我帝國前途の爲め、實に由々しき一大事である。

日露戦争が終りを告げ、我聯合艦隊を解くに當つて、東郷司令長官が部下の各艦隊に、附與された訓示の中に「軍人の職務は連綿不斷の戦闘にして、戦争は一大長期の演習なり」といふ文句がある。僕は實に千古の名言であると、敬服して居る一人である。如何にも其れに相違ない。軍人の職務は連綿不斷の戦闘である。演習は一大長期の戦争である、戦争に勝つも負けるも、平常の演習次第である、平日の練磨次第である。常の研究や練習を積まずにおいて、戦争の時に勝つたいと思つても、

さう旨くは問屋の方で卸さない。そんな希望は飯を食はずに居て、肥りたいといふのと異りはないのである。平生苦しい行軍をし辛い演習をして置いて、始めて戦争の時に其効が現はれるのである。演習の時よりも戦争の時が樂である位に感じて、始めて豫期する効果が收め得られるのだ。嚴格な家庭で立派に躰らな娘さんは、面倒な家へ嫁つても、出戻りとか後戻りとかを、やるやうな氣遣はない。其氣遣のないのは、嚴格な家庭に育つて十分躰られた、結果に外ならぬのである。是等の事がよく分るならば、行軍や演習は最も猛烈に行はなければならぬ。猛烈に行へば、時に一名や二名又二十名や三十名、之れが爲めに命を失ふやうなことが、あるかも知れないが、虎穴に入らざれば虎子を得ずとか、之れは何とも致方がない。あの演習も危険だ此行軍も危険だと云つて居ては、潜航艇を以てする演習とか、飛行機を以てする演習とかは勿論、乗馬演習、實彈射撃、應用體操、障礙物通過と云つたやうな演習は、絶體に出来ないことになるのである。ところが行らざれば上達せず、行はざれば熟達せざるを如何せんである。

軍隊には軍紀といふものがある。軍紀とは、忠君愛國の誠と、一身を犠牲として君國に捧ぐる、大節より發する道徳と、服従と規律との三つより成るものである。軍隊にして若し軍紀が正しくないならば、名は軍隊であつても實は軍隊ではない、所謂烏合の衆である。軍人就中兵卒の中には種々

の人が居る。貴族富豪の子弟もある代り、熊公八公の群から出て居るものも少くない。然るに、どれもこれも立派に帝國軍人たる、舉止動靜を保つて行くのは何故であらうか、いふまでもなく、彼等は軍紀の二字を心得て居るからである。若しも彼等より軍紀といふものを除去したら、元の熊公八公に復つて了ふ人間が、澤山あるのである。だから軍紀は慥かに軍隊の精神である、又軍人の生命である。ところが軍紀は法律でもなければ命令でもない。従つて三百的法律眼から見れば、人権蹂躪だとか権利侵害だとかと、云ひたくなる節があるかも知れない。併しさうなつては、軍隊は最早駄目である。軍人は最早使物にはならない。昨晩も電車の中で次の様な話をして憤慨して居た老人があつた。

新聞を見ると、近頃天下公開の場所でも恐れ多くも 詔勅に對し批評がましい言辭を弄した何人があつたさうである。無論何か重大な原因があつて、即ち惡蟲を驅除せんが爲めについに花に觸れたと云ふやうな工合になつたのかも知れないが、假しどんな原因があつたにしても、這般の事柄たる日本臣民としては到底恕すべからずである。嗚呼日本も眞に世が末になつてしまつた云々だが、我輩は此老人の言ふて居たことを信じない。なせなれば、如何に世が澆季でも何んでも日本人中に、眞底から斯る言動に出る人は毛頭ない、舌の廻轉が烈しかつたが爲めに、所謂脱線したの

だと思ふからである。なほ我輩は事實の有無に拘らずこんな話は聴きたくない。諸君考へて見給へ、若しもそんな様な事が流行り出し、而して其等の風が一たび軍隊内へ吹き込んで來たらどうであらう。それこそ眞に我國軍の一大事で、二度と再び我軍隊が往時の忠勇義烈な動作が出来なくなるに相違あるまい。我輩が聴きたくもないと云ふのは、是等の理由があるからである。無論今も云つた通り根も葉もないことに違ひはないが、風説だけでもこんな事が耳に入るといふのは、毛唐式思想か觀念かに全然縁のないことではあるまいと思はれる。

話が大變錯雜して來たが、是等の方面からする一種の觀察に依つても文明なるものは、戰鬥力を弱からしむる、原因の一であると信ずる。

文明が発達すると、智識が進歩する智識が進歩すると、種々の技術も進歩する。種々の進歩といふことは、此上もない喜ばしいことである。さて智識が進歩し技術が進歩すると、人力を棄て、器械に依ることになる。さうなると、人間の勞力といふものが要らなくなる。歩かんでも汽車に、電車に馬車に自轉車に、又尻車(自働車の別名)に乗ればよい。荷物の運搬、物品の製造、何でもかでも器械に限るといふことになるのである。

鳥渡横丁へ入るが、相撲取と聞けば肥つた大男を連想し、擊劍家だ柔道家だと聞けば、筋骨逞しき

丈夫を連想するほど、彼等の體格が立派であるのは何故であらう。彼等が相撲の修業を積み、彼等が擊劍や柔道の稽古を勵んだからである。若しも彼等が修業をせず、又稽古をせなかつたらば、普通の人間と異りはないのだ。これと同じで、何もかも器械／＼と器械に頼つて居ると、イザ器械が壊れたとか、器械に頼れないとかいふ場合は何とも仕様がなない。お日様のやうに、思つて居た電気がビシヤンと消え、足同様に思つて居た電車が停電で、動かなくなつたのと同じである。

そこで戦争のことを、是等の筆法で考へて見ると、如何に巧妙な器械が出来ても、半分以上は是非人力に俟たねばならぬ。といふのは、戰場となる所に河はない山もない林もない、又水田もない葦原も茅原もないと定つて居れば、打つにも斬るにも進むにも退くにも、負ふのも持つのも運ぶのも器械力に任せてよいが、戰場では平生あつた橋や道までも破壊されて了ふのみでなく、鐵條網とか鹿砦とか地雷とか、堡壘とか狼狽とか拒馬とか云つたやうな、障礙物を殊更に設けて通行の邪魔をするのが常である。従つて不便ではあるが戰場の事の大部分は、矢張り背なり足なり手なり指なりに依らなければならぬのである。従つて器械ばかりに頼ると云ふ望は絶體にないのだ。

素人が戦闘十數日に互りなどいふことを聞けば、十日も十五日も、續けさまに斬り合つたり打ち合つたりするものと、思ふかも知れないが、彼我お互に持つて居る彈に限りもあるので、さう長く續

けらるゝものではない。眞に烈しく打ち合ふとか斬り合ふとか云ふ様な、盛に器械力を發揮する戦をするのは、普通五時間か三時間か位のものである。残りの時間は右へ廻つたり、左へ行つたり進んだり退いたり、マツタ日本軍が退くといふことは、策路以外には先づないが、兎に角一口に云へば、行軍の爲めに最大部分の時間を費すのである。然るに此行軍の遅速が多くの場合に於て、勝敗の岐るゝ原となるのだ。ところで平生器械力にのみ頼つて居ると、前に云つたやうに、身體が役に立たなくなつて居るので、此大切な行軍といふ仕事が出来ないことになる。一概には云へないが、都會出身者の多い隊は、田舎の百姓出身者の多い隊に比べると、遙かに行軍力が劣つて居る事實がある。行軍力が不十分では、進軍追撃何れの方からいふても、頗る不利なことは、今述べた所から考へて明白であらう。都會は田舎よりも、文明が進んで居るのはいふまでもない。して見ると、

此方面から見ても文明なるものは、戰鬥力を弱くするといふことが出来るのである。文明の發達に伴ひ、金力が漸次權力に化して行くやうである。近い歴史を見るがよい。富の前には十九世紀の籠兒であつた、ナポレオンさへも其膝を屈めて居る。一個のロスチャイルド家は、歐洲列國の覇權を隻手に握つて居たビスマルクをして、其鼻息を窺はしめて居たではないか。餘所の國のことは別として、我帝國の堂々たる學者政治家と云はるゝ人で、三井や三菱方面へ媚を送つて居

る意欲地なしがあるまいか。兎に角金力直ちに権力となつては、名譽も金で買へる肩書も金で買へる。即ち金さへあれば、欲して得られざるなく、思ふて成らざるなしといふことになつて来る。さうなると、上下擧げて拜金熱が高くなるのは、人情の免れない所である。然るに文人金を愛し武人命を惜しむに至れば其國亡ぶとは、昔の支那人でさへもちやんと云つて居る。況して文人も武人も商人も百姓も學生も生徒も、又男も女も猫も杓子も金を滅茶苦茶に愛するやうになつては、其結果は説明を待たずして明かであらう。ところが金の光るのは天下太平の時に限るので、イザ戦争となり殊に一敗地に塗れ、作り上げた庭園、飾り立てた室内までも、敵兵の蹂躪に委せねばならぬやうになつては、金ほど直打のないものはないのである。日清北清日露の三役に於ける戰場及其附近の、富豪の悲惨なる有様はどうであつた。今想ひ起しても慄とする程、惨の惨、悲の悲たるものであつた。警察の監視が立派に行き届いて居てこそ金の光りもあるが、其眼を潜つて出沒する覆面の強盗に入り込まれ、三尺の秋水又は銃拳を咽喉に擬はれたらどうであらう。百萬の富が有ても、餽猫一匹の味方よりも頼むに足らない。こんな場合になれば、黄金も惠比壽様もあつたものでない。頼みとなるのは唯一個の實力である腕力である。戦争は取りも直さず此の最後の腕力沙汰である。軍備は即ち其腕力を行使する機關である。少し戦争が遠のくと、天下泰平四海波靜に、安

協定の協商だの同盟だの、通れるものと思ふ人があるかも知れないが、それは大なる心得違である。

廣く東西各邦國の、盛衰興亡の跡を索ねて見給へ。金力で榮えた國はないやうだが、武力で興つた國は數へ擧ぐるに遑なしである。近く亡びた清朝はどうか、太祖努爾哈赤は、父の遺甲十餘と部下數十の兵とを以て、蠻界である滿洲の一隅から起り、漸次四鄰を従へ蒙古を従へ、遂に明を打破つて支那四百餘州に君臨するに至つたのである。彼等は最初尙武の一點張であつたが、幾多歲月の経過する間に、武力主義が變じて金力主義となり、遂に金萬能といふ有様になつて了つて、一人の小文天祥すらも出ず、何時日が暮れたか夜が明けたか薩張譯の分らぬうちに、中華民國と稱するものに變つて了つたではないか。

右曲左折なんだか、餘り要領を得ない説法のやうであるが、此等の方面から觀察しても文明なるものは、慥かに戰鬥力を減ずるものと判斷される。

それから前にも云つた通り世が開けると、言論自由とか何とかと口先丈けが馬鹿に發達して来る。従つて手を動かさないで口丈け動かして、飯を食はうとする人間がどん／＼殖えて来る。現に近來殊に大正の新時代になつてから、此種の人間が頗る多數になつて、只今では彼處にも此處にもウヨ

／＼して居る。然るにいくら世が開けても、口で飯の食へるのは、義太夫語か浪花節語か、乃至講談師か活辯か位なもので、其れ以外には誠に尠い。無論是等の藝人になるにも、相當に修業を積まなければならぬ。鳥渡歌法螺が吹ける位では、一厘の金にもならないのである。ところが幸か不幸か彼等口先丈の輩でも、胃袋丈は一人前のものを持つて居るので、食事は矢張り並に取らなくて生きて居れない。そこで飯食ふ手段方法として、晴天に雨を降らさう平地に波瀾を起さうと、イヤハヤ怖しい事を企らむのである。

士官學校も同期であつたし、日露戦争の際も師團こそは違つて居たが同じ第三軍に在つた男、而して戦役中左足の膝關節に貫通銃創を受け、それが爲め今では現役を退き或る輸出品製造の會社を経営して居る舊友に、八年振で會つたところ、熱血を面に漲らし軍人非軍人合せて五名會同の席上で、次の論を吐き、終つて僕に對ひ、君等現役者の所見果して如何と回答を要求した。

近く我一部國民の態度はどうだ、全く以て本氣の沙汰と請取れないものが尠くない。誠に嘆すべきではないか。

大正の新政早々殊に最も謹慎して居らねばならぬ諒闇中であるのに、焼打事件をやつたのなどが其一例である。考へて見給へ、憲政擁護……閥族打破……之れを叫ぶ必要があつたかどうかは、

言明の限りでないが、警察署を焼けば何になる、交番所を壊せばどうなる、天に向つて唾をするのと擇ぶ所なしである。警察を焼けば復た建てねばならぬ。交番所を壊しても、亦無論造らなくてはならない。彼等の尻拭をさせられる良民こそ迷惑至極である。譯は少し違ふが、官制を改革して陸海軍大臣を文官制にせよ、政黨屋に任せよといふなども、矢張り天唾式たるを免れない。一つ斷つて置くが、僕は豫備軍人と云ふ立場からでなく、今から述べるのは一個の國民として云ふのだ。一體陸海軍大臣がやつて居るのは官制からではなく、編制から來て居るのだ。然るに陸海軍の編制に係る事は憲法に問ふ迄もなく、天皇の大權に屬する。従つて編制上の事は、御委任の範圍外では、一兵卒を動かすことも、一に陛下の御命令を待たねばならぬ。だから改革の是非は兎も角、先づ第一に編制といふものが改まつてからでないかと、獨り官制のみを改めることは到底出來ないのである。併し實際憲政の運用上に不便や不利があるならば、度んで其事由を具し御改めになりましたと、奏上する事が出来るのである。だが今云つた通り編制は全く陛下の大權に屬するのであるから、申上て見たところで、其れはいけなさと仰になつたら百年目で、もう恐懼して引下るの外なしである。先帝陛下の御時代には、往々そんなことがあつたと聞いて居る。して見れば根本の編制を措て枝葉の官制を彼是云つて見たところで、所謂百年清河を待つ

類で、何の役にも立たない一個の空論と云つて差支ないのである。

其れはさうとして、陸海軍大臣なるものがどんな職責を有つて居るかを、軍人外の人達の中に、よく知らない者があると見える。此二大臣の仕事は官制にもざつと書いてある通り、軍政を管理し軍人軍屬を統督するにあるのだ。序に説明して置くが軍人とは、下は二等卒より上は大將に至るまで悉皆の名稱である。又軍屬とは陸海軍部内に居る文官のことだと思つてよろしい。例へば陸軍理事とか海軍主理とか、陸海軍技師とか技手とかは皆軍屬である。尙陸軍丈けならば、赤い帽子を冠つて居るのは悉皆軍人で、好く似た服装で居ても帽子の色の赤くないのは、軍人ではないので軍屬である。

斷つて置くが軍人混同の席上でこんな説明をすると、軍人諸君は何んだ馬鹿／＼しいと思はれるに相違あるまい。ちやが非軍人の人も居るし且つ話の順序として一切擧げて説明に及ぶから、百も二百も承知の方は耳を塞いで居て貰ひたい。

さて今から本論に入るが、陸海軍の仕事を大きく別けて見ると、統帥と軍政とに分れる。而して統帥といふのは、解り易く云へば國軍を指揮統率する方のこと、又軍政は其指揮統率に支障のないやうに種々處理する業務のことである。もう少し委しく云つて見れば、敵國又は敵軍に對する

諸の計畫、軍隊の指揮命令といふ様なことを掌る方は統帥の側で、兵器とか彈藥とか糧食とか被服とかを、拵へたり買つたり渡したりする方は軍政の側である。だから大體からいふと、參謀本部は統帥側の機關、陸軍省が軍政側の機關である。斯う云へば餘程明白に區別が立つて居る様であるが、何しろ統帥側の仕事と軍政側の仕事とは、平時に於ても晝と夜、内科と外科のやうなもので、明瞭區別の附かぬ點が澤山ある。殊に戦時になれば、双方が全く絡み合つて了つて、何れが何うだか少しも譯の分らないことに、成つて了ふのである。

此様な次第であるから、統帥側の仕事をするには、軍政側の心得がなくてはならない。同時に軍政側の仕事をするには、統帥側の心得がなくてはならぬ。何のことはない宮本武藏のやうに、兩刀が使へなければ統帥の方も軍政の方も、其職責を果すことが出来ないのだ。こんな難かしい軍政を管理し、百萬の軍人軍屬を統督するといふ業務が、外の事にかけては兎も角、戦イヤサ其似寄つたことに就ても、獵銃か空氣銃の外持つたことがあるまいと思はれる、非軍人先生達の手で、旨く出来ると思ふか。僕は彼等をして軍政の局に當らしめるのは、山奥の樵夫を下ろして來て、歐洲航路の船長を勤めさすよりも危険であると考へる。

一體陸海軍の仕事は、急病患者に注射するやうなことばかりで、手當が少し後れたり、藥の量

が少し間違つたりすると、直ちに日本國といふ大きな人間の一命が失くなるのだ。政體とか憲法の性質とか軍制とかの根本義を異にして居る、佛國や英國や米國やの事例を牽いて、彼はいふのは理由なきの甚しきものである。イヤ理由は兎に角、此上ない危険を惹起す種となるのである。獨逸、露西亞、埃國をはじめ、立憲君主國たり欽定憲法國たり必任義務の徵兵國たる國で、日本の現制の如く、軍人が陸海軍大臣でない國が、何處かにあるか。今いつた佛國でさへも、一昨年摩洛哥問題で、獨逸との間柄が變になつた時、早速文官出身の陸軍大臣を罷めて、代ふるに陸軍中將ピカールを以てして居るではないか。忠良なる日本國民は此邊のことをよく考へて、飯の種を得んが爲めに、ワイ／＼騒ぎ廻る何とかゴロなどに擔がれてはならない。眼を放つて我國〇〇社會の近況を見給へ。私憤分憤私敵公敵私讎公讎が混亂錯雜し、爲めに昨是が今非となり朝正が暮邪となり、其變化の激いこと實に走馬燈以上である。斯る社會に棲息して居る人々の手で、國家百年の大計である國防に附いて離れない軍政を、勝手に料理が出来るやうになつたら、其結果はどうであらう。古い文句ではあるが、前途我帝國の危きこと、風前の燈が累卵の如しに相違あるまい。我輩が此改革も矢張天睡式であると云つたのは、此澤山な理由があるからである。

次は兎もすれば湧き出す、判檢事試験制度改正問題も、腕主義の僕等武人ヲト今は商人といふべきか………の眼から見ると、理由なきの甚しきものと考へる。といふのは、現制度が帝國大學出身者の外、判檢事にも辯護士にもせぬといふなら、大いに制度の改正を絶叫する必要があるが、さうではない。只一般受験者の學力が、果して或程度まで存在するか否か、少々疑はしいから、試に試験をするといふに過ぎない。無論受験者側は學力の如何を疑はれても、仕方があるまゝと思ふ。なせならばだ。其試験を受けるのが厭だつたら、帝國大學へ入つて卒業すれば、文句のある筈がないからである。見給へ。試験の撤回を希望する連中は、十中の九分九厘まで、高等學校をはじめ入學試験の嚴重な官公立の學校へ、入ることの出来なかつた落伍者のみではないか。尤も人間には早成と晩成とがあるから、當初の落伍者必ずしも後の劣等者とは限らぬ。蘇老泉や佐藤一齋のやうな例は澤山ある。最初の成績が面白くなくても、漸次頭を擡げるのが世間に随分ある。殊に試験は水物と云ふこともあるから、一回や二回の成績で、直ちに學力の優劣を決定出来ない場合が往々ある。現に最初官公立學校の入學試験に失敗して居る私立學校出身者の中に、文官高等試験等の舞臺に於て、曩日の優勝者を谷底に突き落とし、昔の失敗の三倍も五倍も償ふて尙ほ餘ある成功を收めて居る、秀才傑物の少くないのを見ても、其邊のことが分るのである。さて然う

あつて見ると、愈々以て試験の撤回や試験科目の軽減を希望すべきでない。寧ろ試験程度は重くなつてもよい、科目は増してもよい、試験の上には彼は云はない、其代り任用とか昇進とかいふことを二三にするな、甲乙なしにせよ、斯う男らしく出なくてはならぬ。然るに事茲に出ないで、試験を廢して呉れ、科目を減じて呉れとは何たる泣言である。そんな泣言を臆面もなくいふやうでは、社會から、實力がないからあれだと云はれても、致方があるまい。

そこへ行くと醫術開業試験の受験者は感心なもので、試験程度や其施行に就ては何等の苦情も云つて居ない。同じく希望はして居るが、彼れと此れとは大違ひで、試験の廢止に反對し、其續行を希望して居る。此希望ならば制式に學校へ入れない苦學生の保護上、我輩も大に賛同する一人である。

僕は判検事の試験制度よりも、其受験資格の制限を撤回せんことを希望する一人である。其理由は、學資の關係、上學校教育を受けることが出来なくて、獨學に憂身を窶して居る篤學の士が世間に少くない。然るに何々學校に於て三學年以上法律學を修め、其卒業證書を有するもの、といふやうな制限のあるが爲めに、此種の篤學者はいくら力が附いても、直ぐ司法官になる途がないからである。だから専門學校入學者試験檢定とか、小學教員又は中等教員試験檢定とかの筆法に倣

ひ、此方面でも實力主義を採用して、苦學者に酬ゆる方法を講じて貰ひたいのである。

尤も東北帝國大學などでは或る科を限つては居るが、多くは苦學者である中等教員檢定試験合格者を、既に本科生として收容する途を開いた程であるから、早晚學校卒業の肩書のない苦學者が、各方面に活躍することの出来る時代が必ず来るに相違ないと信ずる。今度は文官任用範圍の無限擴張に關する意見である。ざつと二十年程の長い間心血を注ぎ其上澤山な學資を費し、漸く學校を卒業し更に難試験に應じて合格の榮を贏ち得た人間が、官界に投ずる目的は何處にあるか。なれるなれぬは別問題として十人が十人まで、知事か局長か次官か大臣か、何れ此階級の方面にあるに相違あるまい。それであるのに横台から、氣の利いた手紙一本書く力もない、兎もすれば洋書を倒に披いて平氣で居るかも知れない、海外の地名の如き新聞電報に依り始めて承知したかも分らぬ、と云つたやうな先生達が飛び込んで来て、彼等螢雪二十年の苦を経て居る連中の、唯一の目的物を奪はうなどは、餘りに蟲が好ま過ぎはすまいか。種も蒔かず肥料もかけず手入もせずして、收穫丈けを自分の手にしようとするのは、法律學者の所謂不當利得とか云ふものではあるまいか。濃く理窟は排べないが勞せずして功のみを收めようとする、野心家に聽かせてやりたいことがある。柄にない野心を起すことはお止しなさい、半玉なる路程を経ざれば眞の藝妓たる資

格なし、然らざるものは假しなつても到底旨く勤まらざるを如何せん。これ丈けのことである。云へば長くなるから切り上げるが、或る勢力を楯に途方もない野心を充たさうとする者の、出て來ることになつたのも、文明の反射だと思へば大なる間違はあるまい。

此言説が二君の意見に合致するか否かは知らないが、僕の意見には極く接近して居る。併し全然賛成でないことは勿論である。だが今や彼等は軍人でこそあれ在郷者であるから、其説いたところは軍人としてよりも實業家の論として見るべきである。此心持で以て此言説を十分嚼みしめ味はうて見ると、少くとも他山の石たる價値が十二分に籠つて居ると信ずる。従つて是等の方面から考察しても文明開化なるものは、戦闘力を弱めるものとの推斷を下したくなるのである。

均しく無色の酒にも甘いのもあれば酸いのもある。同じ西瓜にも赤いのもあれば白いのもある。鳥渡表面から見た色合や、洩れる匂ひを臭いで見た位では、中々其是非善悪が知れるものでない。然るに近頃、於ける世の出來事を見るのに、何かと云ふと、飲んでも見ないで酸いとなし、割つても見ないで白いと云ひ、深く是非の詮議もせず風和雷同し、寄つてたかつて蠻的行爲を敢てする傾向がある。

相集つて各其意見を吐露し、是非を天下に問ふと云ふことは至極宜いことである。宜いことではあ

るが、其問ひ方が蠻的若くは狂的に陥つては、爲めに及ばず利よりも爲めに與ふる害が遙かに多いことを知らねばならぬ。何を言ふにも何をやるにも、何處までも日本男兒の態度を保ち、熱しても狂せず窮しても亂せずと云ふ遺方であることを要する。如何なる場合でも大和民族の本領を持ち、國利の前に自家なく民福の前に自己なしと云ふ精神が根本でなくてはならぬ。個人的利害や私人的感情が其間に混る様では絶対に不可である。一小部分者の野心達成の道具に使はれるとも知らず、多數者が一種の好奇心から無意識に雷同するやうな風になつては、結局眞面目に勉強するよりも多數のワイ／＼組の力を借る方が得策である。奮勵努力に依るよりもワイ／＼組を利用して悪用する方が、目的達成上の捷徑であるといふことになるのだ。斯う云ふ悪い否怖るべき思想が一般に蔓延したら、將來の日本は何うなるであらう。想像する丈けでも實に身に粟を生ずる。英國の尼先生達が惡むべき示威運動をやるのを見ても、以上云つたやうな傾向は文明開化の副産物のやうである。

數へ擧げて見ると、右から見ても左から見ても、横から看ても堅から看ても、文明なるものは戦闘力を弱くこそすれ、強くする點はどうしても發見することが出來ないのである。だから外の事は知らないが、戦争といふことに就ては、野蠻様に限る、蒙昧殿に若くはなしでなる。

廣山

二五 文明開化と戦闘力との關係を論ず

各論各理あり、兩君の説何れも味ふべき節がある。が平垣君の論は文明の提灯を持ち過ぎ、玉波君の説は野蠻の肩を持ち過ぎて居る。事物各利害ありて、一得一失あるを免れない。文明でも野蠻でも長所のみでもなく短所のみでもない、互に一長一短あるを免れないのである。考へて見給へ。櫻の枝に海棠を咲かせ、芙蓉の色香を罩めたやうな美人だと聞いて、喜んで娶つて見ると、豈圖らん、手も附けられないお轉婆であるとか、才徳兼備の淑女だとあるので、蓋をとつて見ると、七面鳥宜しくと云ふ御面相であるとかいふことは、よく世上にあることである。家柄が立派で容姿が無比で、それで教育もあり氣立も優しいといふ、花と錦と重り合つたやうなのは、滅多に得られるものではない。一體美人………

玉波

廣山君、今日は美人を論ずるのではない。又妻の撰定方を談ずるのではない。問題を履き違へては困る。

廣山

別段問題を履き違へて居る譯ではないが、それでは直説法に論ずることにしよう。世が文明に進むと、智識が発達する技術が進歩する。其結果、從來百人でなければ出来なかつたこ

とも、一人で出来、男でなくてはならなかつたことも、女で結構といふ有り難いことになるのである。汽車汽船電信電話燈瓦斯の如き、何れも野蠻時代には夢想だも及ばなかつたものである。殊に近頃では魚の動作に髣髴した潜航艇とか、鳥の動作に等しい飛行機とか飛行船とか、無線電信電話とかいふやうな、ど豪いものまでが發明されて居る。此勢では地獄極樂へ往復が出来、月の國や龍宮などへ旅行の出来るのも、遠い未來のことではあるまいと考へる。文明の恩澤も亦大なりと云はねばならぬ。

吾人軍人の生命とする兵器も非常な進歩である。先づ我國の歩兵の持つ鐵砲丈でいふて見ても、明治初年から今日までに四回も改良されて居る。即ち明治四年に常備軍を設けられた時には、英國製のスナイデル銃を持つたものだ。其れが明治十三年には村田歩兵銃に變り、同じく十八年には十八年式に改められ、同二十二年には村田連發銃となり。同三十年には三十年式歩兵銃が制定され、同三十八年には三八式歩兵銃が制定されて居る。兵器の進歩は火薬の發明に原因することはいふまでもない話、従つて火薬は疾くの昔に無煙火薬といふ烟が出なくて、而かも怖るべき威力を持つて居るのが出来て居る。砲兵の用ゐる俗に云ふ大砲は勿論、機關銃拳銃をはじめ、どの兵器もどの兵器も實に驚くべき進歩である。兵器が進歩すれば戦闘力の強くなるのは知れたこと、して見ると、

文明開化は戦闘力を強くするものと断定せざるを得ない。

然らば文明は、戦闘力を強くするばかりであるかと云へば、決して然うではない。といふのは、世が文明に赴くと、智識も發達する技術も進歩するに相違はないが、智識と技術だけでは無論戦争は出来ない。よし又出来ても勝てない。戦争に勝つ本家本元は、忠勇なる精神である義烈なる精神である。如何に智識が發達して居ても、技術が進歩して居ても、此精神が缺けて居たら、平生の演習に於ては兎も角、砲彈彈雨の中では何の役にも立つものでないからである。日露戦役の上から考へて見ても、其然る所以がよく分るのであらう。兵の體格と云ひ銃と云ひ砲と云ひ、何から何まで敵方は實に立派なものであつて、我國のものは全く比べものにならぬほど劣つて居たのである。然るにあの結果を得たのは何かと云へば、日本兵には露西亞兵にない忠勇義烈の精神、即ち日本魂と武士道といふ特別の援隊があつたからである。ところが此大事な日本魂と武士道とが新文明の爲めに、日に月に頽れて行く傾きがある。教育でも、昔は人を作るといふのが本旨であつたのであるが、近頃ではそれが變化して來て、單に智識を授ける技術を教へるといふことになつてしまつて居るらしい。従つて十五年も二十年も學校へ出して置いても、第二の松陰が出来るの第三の尊徳翁が出来るのといふことは先づない。俸給を貰つて居るから、教師は生徒に教へるの義務あり、授業料を拂つ

て居るから、生徒は教師に習ふの權利ありと、神聖な教育までに金といふ奴が附いて廻はり、義務だの權利だのと、宛然裁判沙汰の様である。何のことはない只今の教育は、蓄音器的であると云ふのが適評であらう。無論師弟の間に情誼も何もない、路傍の人と異りなしといふ有様である。若し此惡風が軍隊内にまで吹き込んで來て、上官と部下とは階級的關係の上から、一時的に結び附けられて居るに過ぎないといふやうな事になつて、上官の方で部下を見るのに、兵營に居る内こそ師弟とか親子とかいふ關係もあるが、一旦除隊した後は、何の關係もない一個の市民である。又部下の方でも上官を見るのに、隊内に居ればこそ先生とも仰ぎ親とも敬ぶが、満期の上は何の關係もない赤の他人である。と云つた風になつて了つては、双方の間に情誼も糸瓜もあつたものでない。さうなつては表面隊伍を組んで國家の大事に従事はしても、好い結果を得られないのは必然である。教師兼上官側の人のことは知らないが、生徒兼部下側の人の中には、軍服を脱いで平服に着換へ、營門外へ一步を踏み出すと同時に、そんな真似をする人が近頃往々あるやうに見受けられる。斯る傾向になつて來た罪は上にあるか下にあるか知らないが、結局するところ、新文明なるもの、産み出した結果に相違ないと信ずる。是等は反對に文明なるものが、戦闘力を弱くするものと云はねばならぬ。

封建時代に於て、素町人だ士百姓だと云へば殆んど人間扱にされなかつたので、一寸したことに
も切棄御免とかいふ厄に遭つたものだからである。其れが世の中が開けたお陰で、實業家と崇めら
れ地主と尊ばれることになつて來た。即ち土農工商其種を論せずといふことになつた。ところが人
間は妙なもので位置が上ると、多くは品格も上つて來るものである。然るに昔武士階級にあつた人
々や其子孫たる人々は、今日だからとて別段地位が下つた譯でない、今も昔も同じ事である。只兵
馬の權が原へ復つたのと、政權を擅にすることが出來なくなつたまでのことである。昔金であつ
たのが眞鍮に變つた譯でもなければ、銀であつたのが鉛に化した譯でもない。果して然うであると
すれば、一方は今も昔も變りがないのに、一方は昔よりも頗る善くなつて居ると云はねばならぬ。
だから世が文明となつたが爲めに、昔よりも一般國民の人格が上に向き品性が高まつて來たと斷定
することが出来る。一般國民の人格が上り品性が高まつて來て居る以上、國民皆兵制度の軍隊が善
くなつて居るのは當然である。既に軍隊が善くなつて居れば、戰鬥力も亦従つて強くなつて居るこ
とは論するまでもない。

又文明の結果である憲政即ち代議制なるものは、國家の萬事を公論に決するから、至つて間違のない
ものである。且つ最も公平に事が處理されるものである。野蠻時代と云へば少し語弊があるかも知

れないが、まだ世の中の開けぬ封建時代では、一二乃至三四の者が隨意に國の政を行つたが爲め
に、種々專横なことをやつたものゝやうである。一體世の中に不平の起るのは、擅な行爲をやるも
のがあるからのもので、萬事が公平無私に行けば不平などの起るものでない。不平が起きねば、内
輪喧嘩などが始まるものでない。内輪に喧嘩もなく悶もなく圓滿であれば、外部に向つて全力を注
ぐことが出来る。即ち舉國一致で外國に當ることが出来るのである。戰爭には國民の後援といふこ
とが肝要で國民の大なる後援がなくては光輝ある戦勝は望まれない。然るに今述べた如く、開けた
憲政の世の中では、萬事が衆論に依つて決せらるゝから頗る公平に行はれる。従つて内輪に悶著が
起らない。そこで全國民が一致して軍隊の後援となるのだ。さてさうなると、戰鬥力は自ら強か
らざるを得ないのである。

文明が戰鬥力を強くするといふのが二つも續いたから、今度は之れと同時に文明なるものが、戰鬥
力を弱くするといふ方面へ話頭を轉がさう。

吾人が文明の御世を迎へ實なる開化の聖代に、腹鼓を打つて暮らして居るのは、一に陛下の御恩
澤である。だから官吏は官吏の職務を、軍人は軍人の職務を商人は商業を百姓は農業を勵み、以て皇
恩の萬分一丈けでも報ずるのが當然である。然るに少々位置が高くなつたり金が溜つたりすると、公

を奉ずるの身を忘れて投機界に足を踏み入れたたり、商品に微を生じて置いて政治運動に狂奔したり、田圃に草を生して置いて柄にない時事問題に熱中したり、其結果自身を害し社會を毒し國家を損するといふやうなことは、世が文明に赴くに從ひ其度を増す事實がある。現に我國各種社會の狀態を觀察するに、餘程其臭味があるやうに感ぜられる。否臭味どころでない、生きた立派な證據がある一つ其例を擧げて見よう。

學者である論客でござるといふ人々の話を聴くと、「日本の人口は年々非常な勢で殖えて居る、然るに耕地には限りがある、此上何程も開拓の餘地がない、毎年〳〵多數の米穀を外國から、輸入して居るのを見れば其邊のことがよく分る、行末の日本はどうなるであらう誠に心配でならない」とのことである。

成る程仰せの通りの懸念はないではない。併し田舎の村落へ往つて見ると、土地の足らぬ心配よりも心配でならぬことがある。現在ある立派な土地が漸次荒れて行くのが、即ちそれである。昔は豆なり小豆なり又桑なりが植ゑられてあつた畑が、只今では荒地になつて居るところが少くない。村の老人に其理由を聞くと、此頃の若い者共は、骨折つて作つて見たところで、積つて見れば敷島三つか四つの價にしかならない。其内から肥料代などを引去ると、それこそ酒一合代ほども残らない。

詰らぬ僅かな土地に耕作をして骨を折るよりも、遊んで居る方が氣が利いて居る。東京や大阪へ行つて見給へ、日の内一寸働いても五十錢や一圓の金を取るのは譯のない話だ。田舎生活殊に百姓ほど馬鹿々々しい仕事はないといつて、少しの畑位はテンデ見向もせないます。實際都會へ行けば何もかも至つて便利な上に、綺麗な所に居て樂な仕事をして居ても、随分金が取れるさうですからな。

このことである。して見ると心配なのは田畑の足りないことではなく、有るところの地面を荒して居ることである。善い田舎生活を厭つて、悪い都會生活を喜ぶ思潮の蔓延である。僕の最も心配でならないのは、學者論客の所謂人口の増加ではない、今云つた農村の荒廢である。

こんな悪い思想を地方の農民に傳へた又傳へつゝあるものは誰であらう。地方から修學といふ美名の下に、都會へ出て来て墮落といふ稱號を得て歸郷する、所謂ノツペリ式の學生共に非ざれば、政治屋の手先となるのを無上の充榮と心得、妻子や親族や友人が、眞心單めて諫める忠言を耳にも入れず、無理算段で以て旅費を調へちよいと都會に往復し、遂に都市の惡風に感染して了つた田紳共に相違あるまい。之れと云ふ災難にも何にも遣はないで、祖先傳來の田畑から家藏までも失くして了ふものは誰あらう、皆此種の先生達である。皆といふのは少々酷かも知れないが、先づ其大部

分は、是等の連中の中から出ると思へば間違がないのである。

都會に澤山なものは人間ばかりで、仕事は誠に少い。日に二十錢も三十錢も儲けようとするには、餘程技能のあるものが、汗を流して働かないことには駄目である。確實に金の取れるのは農業に限る。農業の右に出る仕事を都會で見附けるのは、中々容易なことではない。都會には田舎の村では名も聞けない、不良少年とか不良少女とか云ふ、末恐ろしき悪者の雛も居、竊盜詐偽強盜殺人と云ふやうな、怖るべき悪魔が日夜幾組となく、其處此處に横行して居るのを知らねばならぬ。而して其悪魔の多數が地方出身者であることを知るならば、濡手で粟の希望を抱いて、地方から都會地へ出て來た人間の中、すつかり當が外れ、自暴自棄の果が浮浪人の群に入り込み、遂に救ふべからざる大罪人となるものが、如何に多數であるかは、説明を俟たずして解るだらうと信ずる。

體格からいふても氣質からいふても、兵隊として申分のないのは田舎の若者である。口先ばかりで體力氣力の伴はない都會出身者は、兵隊としては到底田舎育の人に及ばない。然るに今述べたやうに、悪い思潮が農村を風靡し、我帝國の中堅である農民を、日に月に墮落の淵に引入れて居るといふに至つては、實に長歎息の外なしてである。僕が前に、世が文明に越くに從ひ、自身を害し社會を毒し國家を損するといふやうなことが、殖えて行くと云つたのは、是等の事實があるからである。

日本國民の政治思想は誠に幼稚である。萬機を公論に決する立憲政體に變つてから、二十幾年になる今日、尙ほ「由らしむべし知らしむべからず」に甘んじて居るやうでは誠に情ない。今日の我國民に何よりも必要なものは、政治教育であると絶叫する人士が随分ある。如何にも其通り我國の政治思想は、極く幼稚否寧ろ皆無に近い程憐れな有様である。是非其進歩發達を、圖らなくてはならぬと信ずる。一部少數者に國家の大事を一任して、顧みないやうでは頗る困る。又實際危険至極である。

諺にも三人集れば、文珠の智慧といふことがある。多數者の意見は先づ間違のないものと思つて宜しい。支那の古の學者が、政は民意を質して行はぬばならぬと云つたのは理由のあることで、爲政者の忘れてならないことである。然るに如何に民意を質すの必要があつても、一々各人の意見を聞いたり各人に意中を述べさせたりする譯にはゆかない。そこで民意が總括されて、社會の表面に現はれるものに外ならない輿論といふのが必要になつて來る。それなら民意を斯ういふ工合に社會の表へ出して、輿論といふものに誰れがするのであらうか。國民の代表機關である帝國議會就中衆議院と、社會の鏡である新聞雜誌、此二つが其最も主なるものである。だから輿論といふものをざつと分解して見ると、議事堂内に響くところの言論、新聞雜誌の上に現はるる記事、先づ此二つであると

思ふてよからう。輿論の説明は此位のところまで止めるが、兎にも角にも國家の政を行ふ上に於て、輿論は貴重無比のものである。従つて輿論を無視して盲く政を行はうとするのは、病状を知らずに藥を盛ると同じで、取返し附かぬ悪い結果を見ることが多いのである。

輿論は此通り貴重なものである。同時に輿論を作る機關の責任は頗る重い。其頗る重い責任を遺憾なく果すには、果せる丈の實力がなくてはならぬ。之れなければ到底其責任が果せない。若しも其の責任を果すことの出来ない様な、即ち頼むに足らない當にならない機關の言論を、民意の代表である輿論と心得て、政を行つたらどうであらう。其結果は病状を知らずして藥を盛つたよりも、寧ろ危険が多い。馬鹿斥候の報告、又は嘘八百を列べた情報信じて、味方の對敵動作を決定することと同じ運命に逢著するを免れないのである。

玉波

廣山君、君は先刻から輿論を作る機關と云つて居るが、輿論は流言と違ふから、いくら議會でも新聞でも、作るの布くの廣げると云ふ譯にはゆかない。君は輿論と流言とを取違ひて居ると見える。否輿論と靴や下駄の類とを履き違ひて居るに相違ない、従つて造るの拵へると云つた様なことが云へるのである。尤も近頃の政黨や新聞の中には何かと云ふと、自黨自社に都合のよい意見

欠

欠

代議士も全くないと云へないかも知れぬ。「あれでも代議士だとサ」と料理屋や待合の女中までに、輕蔑されて居るやうな人もないでもなさ相である。若しそんな連中が現に議員の中にあるとすれば、いふ迄もなく我國民に政治上の智識がないからである。僕が政治思想の發達を希望する理由は、何れ劣らぬ立派な代議士を出して、彼等の口から健全な輿論、即ち國民の眞實の聲が聴きたいと云ふにあるのだ。新聞や雑誌の記者の伎倆とか人格とかは、不幸にして僕も亦知らないが、斯界に軍事的智識のある人が乏しいことだけは、軍事に關係ある記事の上から判斷することが出来る。黒人目から見ると、演習の報道を始め軍事に關する記事の中に、珍無類なのが随分ある。正確な穩健な記事が社會に多大の利益を與ふると同時に、誤報謬説の與ふる害毒も亦甚大なものである。そこで大きな注文はせないがせめては、帝都の新聞社乃至雜誌社に少くも一名位軍事通の記者が居て、正確に軍事百般の出來事を傳へ、併せて軍事思想の普及に努めて貰ひたいものである。以上述べた地方の荒廢以下のごとは、或は直接に或は間接に戰鬪力を弱くする原因を成すものと信ずる。

要するに世の文明が進歩すると、戰略とか戰術とか兵器彈藥とか器具材料とかいふ、智識に關係ある事柄は、愈益改良される。従つて此方面から見ると、文明開化は戰鬪力を強くするのは疑のない

い。そこで一々其賛否の箇條を擧げ十分具體的に評論を加へる豫定であつたが、思はず餘談に亘り澤山な時間を費したが爲めに、其れが出来なくなつたのは、實以て遺憾至極である。だが、今となつては何んとも致方がないから、只一句結論を述べて本論の終結とする。

要するに一言以て本論を掩へば、文明開化なるものは、物質的方面に於ては戦闘力を強くし、精神的方面に於ては戦闘力を弱くする、之れが文明開化と戦闘力との關係である。(了)

絶叫終

大正三年四月二十五日印刷
大正三年五月一日發行

絶叫奥附一
正價金壹圓貳拾錢

著者 山田久太郎

發行者 柴田源藏

印刷者 横尾民藏

東京市麴町區飯田町二丁目三十三番地

發行所

株式會社 兵林館

電話番町六八九番
振替口座東京四九三六番



319

308

(E)

終